

名古屋における童謡運動－昭和初期

戸蒔恭紀

(愛知県立大学)

『赤い鳥』に端を発する童謡運動が、下火になってから後、しばらくしておとずれた第二次童謡運動は、1930年代中頃の数年間、大きなうねりとなって全国に広がった。名古屋の童謡運動は、1933年(昭和8年)7月、同人誌『風車』を創刊した時から本格化した。この運動の中心となったのは、童謡詩人中条雅二(1907 富山～)と作曲家小股久(1905 大分県日出～1989名古屋)である。

『風車』は最盛期20名を越える同人を擁し、詩人、作曲家、舞踊家が参加した実践集団だった。

小股は、1924年(大正13年)東洋音楽学校を卒業した後2年ほど東京にとどまって、童謡の作曲をしていたが、NHK名古屋放送局(JOCK)の仕事がたびかさなり、それを契機に名古屋で種々の音楽活動が増えてきたので、1926年名古屋へ居を移した。この地では最初、市内の小学校の音楽教師をしながらの活動であったが、それが幸いし良き少女歌手を得た。ラジオ放送やレコード吹き込みには、少女歌手は欠かせない時代であったから、その歌手谷中(旧姓)雪子の存在は重かった。そして、小股の音楽活動は、どんどん広がって行き出し、その地域も中京地区内にとどまらず、北陸、関西に出かけることも多かった。

小股の活躍は、詩人中条を引き付けた。中条は、おりからの童謡ブームで、自由詩から童謡詩への転向を考えていたので、中条の詩人仲間の紹介により、小股との交際が始まった。そして、彼の道は、決定づけられた—中条は、その後現在に至るまで、童謡詩を書き続けている。

中条の書いた詩に、小股が曲を付けて発表する。それが、ラジオ放送されたり、レコードになって発売されたり(その頃小股は、ニッソー、タイヘイ、ツル、コロムビア、キングの各レコード会社とつながりがあった)したから、中条のもとに多くの詩人が集まりだした。小股は、彼らの作品を一手に引き受けて作曲した。

同志を募っての活動は、まず『紙芝居』という同人誌を発行することから始まった。1933年(昭和8年)3月、第1号(表紙には、第一幕と印刷してある)が創刊された。A5版9ページ目の巻末にある同人(とは称していないが)名簿には、5人の詩人が名をつら

ねている。他に、振り付け部と作曲部が顧問という名で記されている。

隔月で発行する予定の同人誌だったが、わずか3号で廃刊となった。原因は、運動の方向づけのあいまいさにあったようだ。第1号の「あとがき」には、「純粹童謡と、実践的運動への重大な役割を果たす」とうたっているように、二股膏藥だった。

しかし、その反省を生かして、実践に徹する童謡運動が、『紙芝居』廃刊後間すぐに、開始された。同年7月、中条、小股ら『紙芝居』と同じメンバーによって同人誌『風車』が発刊された。『紙芝居』のようなカラー印刷表紙、上質紙ではなく、タブロイド版4ページの質素な同人誌に変わったが、1000部印刷し、放送局やレコード会社等童謡に関わりを持つ機関、個人に幅広く配付した。『風車』にも、前誌からの習わしとして楽譜付きの童謡を、1～2曲掲載した(但し、載せなかった号もあった)。

歌われる童謡、そして積極的な実践が功を奏して、『風車』の「あとがき」は、同人たちの活躍を伝える報告に、いつも満ちていた。それらによると、彼らの発表の場は、NHK(名古屋にとどまらず、中部各局も)、各社のレコード、音楽会、舞踊発表会等であった。『風車』の童謡は、たいそうもてはやされた。小股が行う音楽会の『名古屋雛菊会』(次ページ参照)発表会は、子どもたちの歌、踊り、ピアノ他もりたくさんの内容で、『風車』同人の作品が、沢山披露された。会場の名古屋市公会堂の周囲を、入場待ちの客がふたまわりもするほどになり、警察から苦情が来るまでになったそうだ。

たたみかけるような積極的活動は、短期間のうちに次々と実行された。『風車』掲載の楽譜を、一括して編集した『風車童謡曲集 第一輯』も1934年に発売している。作詩は11人、すべて小股の作曲で、計20曲が載っている。『風車』誌では、たびたびこれを宣伝しているし、彼らの実践状況から、相当の需要があったのは、確かのようなのだ。

同人誌『風車』は、半分弱の10誌分しか現存していないが、中条らの証言も加えて推察してみると、1934年6月のNo.12から、同年9月No.15あたりが頂点のようである。同人名簿(にあたるもの)には、詩人15

人、作曲家4人、舞踊家5人の計24名が記されている。ただし、作曲家には、佐々木すぐる、中野二郎、松田鉄雄の名があるが、多分に精神的援助のようであったらしい。前述のように、作曲は、小股がすべて引き受けていた。佐々木ら他の作曲家との交流はあったようだが（特に小股は、その頃の東京の童謡作曲家とはかなり交際があった）、直接『風車』同人として、作曲活動に加わったことはなかったようだ。

舞踊家たちとは、密接な関係であった。舞台上上がる童謡は、多くの場合振り付けを伴っていたからである。石井小浪は、『風車』誌に、しばしばその名が登場する。石井は、振り付け指導に、何度か名古屋および中京地区に来て、講習会を開いている。

『風車』運動が成功したもうひとつの原因に、この運動を支えた、ふたつの後援会があった。小股は、来名後しばらくして、子どもたちにピアノや歌を教えるために、『名古屋雛菊会』を作り、名古屋市内と同周辺の子どもたちを、精力的に指導していた—この時代の小股は、音楽教育のみならず、自身の演奏会からラジオ放送劇伴の作曲、種々編曲等々多岐にわたる活躍であった。『風車』の発行は、『名古屋雛菊童謡会』になっていた。これは、『名古屋雛菊会』会員（子ども）の親が関わる後援会で、『名古屋雛菊童謡会事務所』が、一会員の親宅にあり彼は『風車』同人でもあった。他にも『風車』同人や、同誌に投稿した人の中に、『名古屋雛菊会』会員の親は多い。『名古屋雛菊童謡会』の後押しが、『風車』運動の強力な追い風になった。それとは別に、『名古屋雛菊後援会』というものもあった。これは、『風車』同人のひとりが、個人の立場で始めたらしい。彼はすでに亡く、詳細はわからないが、関係者らの証言によると、相当な資金援助もしていたようだ。『名古屋雛菊後援会』は『ヒナギク』と題するものを、タブロイド判1ページで、『風車』の付録という形で発行していたが、創刊の言葉を読むと、『名古屋雛菊後援会』が、『名古屋雛菊童謡会』を支援する、とあり、『名古屋雛菊後援会』→『名古屋雛菊童謡会』→『風車』と結ばれる。ふたつ後援組織は、この童謡運動に充分貢献した。

しかし、すべて順調に進んでいるようにみえた『風車』が、何のまえぶれもなく突然廃刊になった。1935年（昭和10年）5月である。最終号となった『風車』22号には廃刊の弁もないし、解散の宣言もないどころか、あとがきに当たる欄には、『風車』同人の第一回作品発表会を行う予定日まで書いてある—結局、開かなかった。傍目にはまったく急な解散であったが、ひ

とり中条だけは、『風車』最盛期からすでにこの運動に疑問を持っていたらしく、それが堰を切ったのが5月ということだ。

中条は、自身の童謡観の変化からだと言っている。子どもたちに歌ってもらわなくては、童謡ではない、と信じて始めたこの運動であったが、違った生き方をする詩人との出会いが、彼の童謡観を大きく動かすこととなった。

有賀連の詩は、中条の心を少しずつ変えていった。北原白秋門下の有賀連は、『風車』同人としても一時名をつらね、詩を投稿していたが、彼らのもとを去って後、中条は、その影響の大きさを徐々に実感するに至った。それが、読む詩への転向だった。歌われる詩はまた同時に、詩人の心の純粋さを邪魔しかねない。『風車』の実践主義路線とは、相いれなくなった中条は、この運動を牽引してきた自らの手で、廃刊にふみきった。そして、指導者を失った『風車』同人たちは、なすすべもなく解散した。

1933年7月から1935年5月までの『風車』運動は、中条と小股という両輪が、そろったからこそ展開であった。ふたりの出会いが、名古屋の童謡運動を、興した。『風車』解散後も、ふたりの交わりは、絶えることなく続いたが、中条は、『風車』廃刊後、『衣装と暦』、『紫苑』、『えんじゅ』と童謡同人誌を出し続け、現在に至っている。小股は、1988年秋まで、毎年一回（戦争中の一時期を除き）のわりで、『名古屋ひなぎく演奏会』を開きつづけ、53回という記録を残した。ひとつの生き方を貫いた。

〔参考資料〕

- ・童謡同人誌『紙芝居』 1933 年
- ・童謡同人誌『風車』 1933 年～35年
- ・童謡同人誌『えんじゅ』 1963 年～88年
- ・日本童謡協議会編『季刊どうよう』チャイルド社 第3号 1985年
- ・木坂俊平『関西の童謡運動史』木坂俊平遺稿刊行会 1986年